

立川

立川と語ろう 立川に生きよう

June 2022

Écoutez Bien Vol.38 No.447

6

シリーズ 今の立川を作った人たち



四文屋でぐぎい

「田沼時代」がもたらしたもの

八代將軍吉宗から九代將軍家重のはじめ頃まで、

徳川幕府を通じて最も高年貢額の時代だった。

しかしこの時の備蓄金がその後の幕府破綻を救うことになる。
異常気象、大地震、疫病、火山の噴火、大飢饉。時代は繰り返す、のか。

田沼意次は九代將軍家重・十代家治に仕え、御側御用取次・側用人から老中となり幕府の実権を握ったが、「田沼時代」は賄賂政治の代名詞ともなる。しかし、江戸文化が育ったのも「田沼時代」。「享保の改革」は大きな政府を目指し、「税金は高いが福祉は充実している、なんでも国が面倒見る」あり方だった。一方「田沼時代」は庶民を自由に泳がせて経済を回し、ここぞというところで吸い上げる重商主義。「享保の改革」で、窮屈に辟易していた庶民は、たとえ景気が悪くても、ほんの少し余裕ができればいつもと違うことをする習い。食べ歩きや寺社参詣、趣味の川柳を投稿する。人間の活力は余裕から生まれるという証。

勘定吟味役に登用された川井久敬は貨幣改革を実施。いくつもの改革案の中に「寛永通宝当四文銭」があった。銭形平次が使う寛永通宝は一文銭。川井が考案したのは四文銭。同じように「寛永通宝」と記してあるが、裏面は波目の青海波。以後、ものの値段の基準が「四文銭何枚か」に変わっていく。蕎麦の値段は「十六文」。二八蕎麦というけれど、実は四文銭が四



枚のこと。蕎麦屋の引き札（広告）を見ると、十六文から始まって二十四文、三十二文と豪華になるにつれ、四の倍数あるいは八の倍数になっていく。

明和四、五年之頃、五匁銀・四文銭、安永元の頃南鐮銀初て通用、重宝なり：昔くだりぎやうせん、小き桶に入、提て歩行く、其後、家台見世の様にして、けづりぎやうせんと云、右の家台、其後は煮肴。にしめ・菓子類、四文屋とて両国は一面、柳原より芝までつゞき大造なる事也（紫村盛方『飛鳥川』）

一鍋内、数串芋を貫き、種々烏を蘸す。鍋沸して烟馨し。一串（一以て之を貫く）四文（支行忠信）人の扱ひ食ふに従す。此を四文屋と曰ふ（『江戸繁昌記』）

重宝な四文銭は、ちょっとしたお菓子や煮魚、煮染めなどをワンコインで売る店を生み出し、両国は一面、柳原から芝までずっとそんな屋台が続いていたという。こうして四の倍数の社会、庶民的な価格体系ができあがっていった。ワンコインの魅力は今も昔も変わらない。

銀座通りの宝山堂

人と知り合い、関わって、奇跡に生かされていると感じる毎日

2021年6月号のえくてびあんに、『甦るあの頃』と題して、ゴム印の押されたノート「印譜」を掲載した。押されたゴム印の中には、すでに消えてしまった企業もあるが、世代を超えて反映している会社や団体もある。「印譜」を通してあの頃を、印章店「宝山堂」の齊藤さんに語ってもらった。

——この印譜が、宝山堂さんのご関係のものであったとは。驚きでした。

齊藤 これは誰が持っていたのですか？
——まったくわかりません。ある方がネットオークションで落札されて、自分が持っているよりこれはえくてびあんが持っていた方がいいだろうとおっしゃって、えくてびあんに譲っていただきました。いなげやの猿渡さんから、これは宝山堂さんに尋ねるのがいいだろうと教えていただき、ここに至りました。昨年6月号に掲載した折、このゴム印を彫った間宮哲さんからもご連絡いただきました。

齊藤 今は、印鑑自体の需要が減ってしまっただけでね。ゴム印の中でも、これは「鑄造」というものなんです。昔の印刷は活字を拾って活版にしていました。それと同じ作業をしているんです。活字を拾ってゴムの印面のところに並べて、新聞の紙面を作るようにして作るんです。当時は朝鮮動乱の特需でものすごくたくさん仕事がありました。リング箱を自転車につけて、父が毎日米軍基地の中に納めに行って、その場でドル建ての小切手をもらうんです。50日くらいしないと現金にならないんですが、米軍基地の銀行の人がうちに来て、現金にしたいのなら、多少手数料をもらうけれどもうちでやりますよ」と言ってくれて。そういう商売をしていましたね。

——印譜には英語のものも多いし、戦後のゴム印も多いようです。でも始まりはもっと前のようで、昭和11年に立教された今の真如苑さんの「立照閣」という文字もあるん

です。
齊藤 これを彫ったのは間宮壽石さんなんだあ。これは手で彫っています。厚さ5ミリくらいの生ゴムのゴム版を台座に固定させて、小刀1本と鋭いピンセットで彫るんです。実はうちにも同じような控えがありましてね、ご覧になるとわかると思いますが、字が同じでしょう。これが間宮さんの仕事です。
——細かい仕事で、すごいですね。

齊藤 お持ちの印譜は間宮さんがした仕事の控えです。職人は仕事を完成させるとまずここに押します。これが自分の仕事ですよという印譜なんです。次に、別のノートに押す、それがうちへの請求書になるんです。ですから、うちにも同じようなものが残っているわけです。ゴムの彫り職人は、当時3多摩でも3、4人しかいませんでしたね。
——なるほどねえ。

齊藤 うちのお祖父さんが彫った印鑑の印影は、うちの控え、昭和元年とある、こちらがそうですね。まだ東京府の頃です。雅号を皎堂といいました。
——これも小刀で彫るんですか。

齊藤 もちろん。印材、当時は例えば象牙とか、あるいは水牛とか。それを竹でできた「受け」に固定して、小刀で彫っていくんです。印面に朱墨を塗って、朱墨を乾かした後に、彫る文字を雁皮という薄い紙に原寸大で自分で書いて、書いたものを印面に逆さにして載せて、上から水で濡らしてそっと剥がすと黒い墨が残る、それをガイドラインにして小刀で彫っていきます。
——縁がとて細くて、すごいとしか言いよ

うがない。
齊藤 印鑑って、中の文字をきれいに見せるには周囲をできるだけ細くするんです。
——お祖父様はすごい職人さんだったんですね。

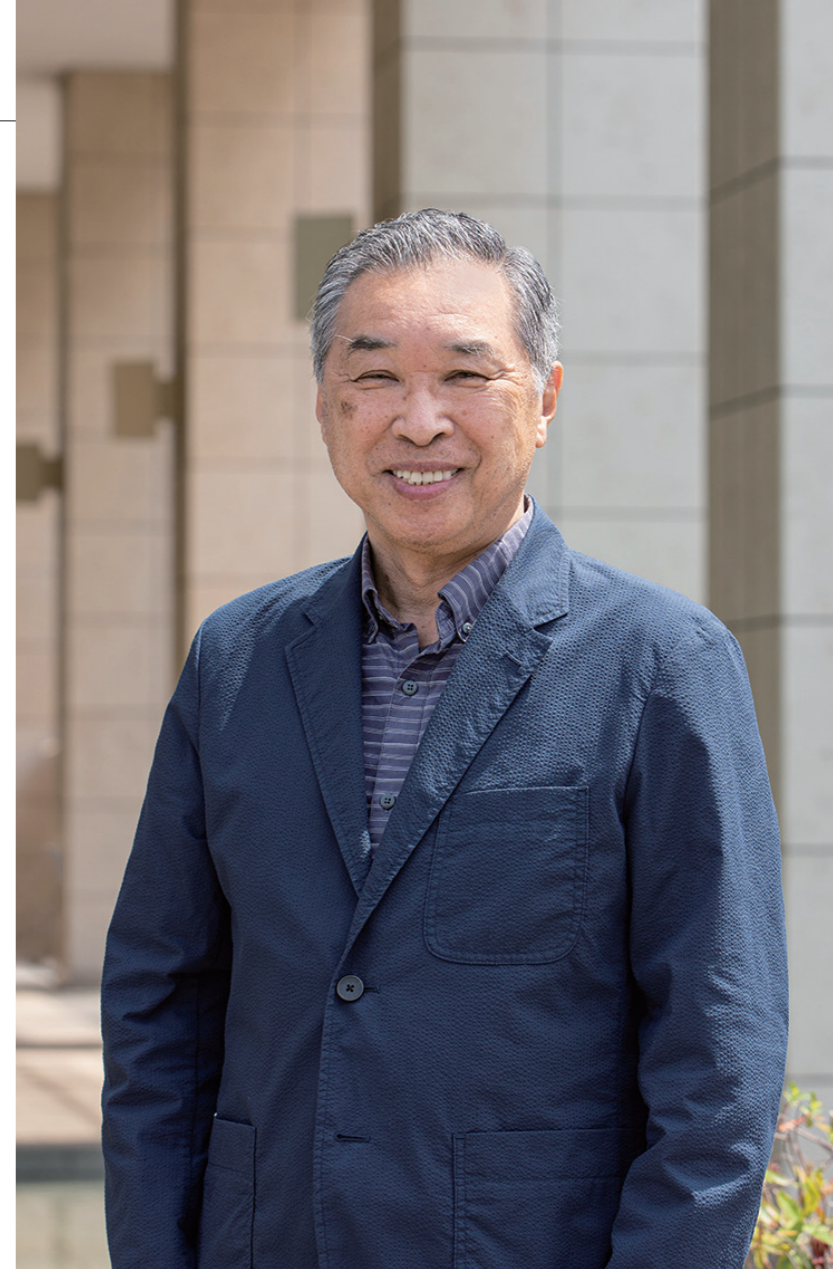
齊藤 うちのお祖父さんは所沢の生まれ。8人兄弟で、印鑑の職人になったのはお祖父さんと上の兄だけ。お祖母さんが明治20年生まれで、お祖父さんは10才年下です。一緒になったのだけれど、歳の差があって所沢には居づらいうからと立川へ出てきて、ハンコの仕事をしていました。当時は今のシネマ通りに仮店舗で営業してたと言っていました。それから鈴木清さんのご縁で銀座通りに土地を買って、駅前に店舗を持つようになりました。うちの隣が岩崎さんの倉庫の入口で、僕が小学生の頃は、まだ馬車の往来がありました。

——銀座通りが賑わっていた頃ですね。お祖父様は明治30年生まれなんですよ。
齊藤 ええ。うちのお祖父さんは87で亡くなったのですが、真如苑さんの開祖教主様とは親しくさせていただいていたようです。教主様がまだ立飛にいらっしゃる頃、会社の帰りにシネマ通りの店によく寄られていたそうです。その後もたくさんお仕事をいただきましたね。

——そういうご縁があったんですね。お祖父様は齊藤俊さん、有名人でいらしたとか。
齊藤 父は大正10年生まれで、ほとんどハンコの仕事はしなかったですね、公職ばかりで。所沢で招集されて戦地に赴き、シベリアに抑留されて何か所か収容所を回ら

あきのぶ
齊藤旦伸さん

昭和22年生まれ。株式会社 宝山堂 顧問。印章店の4代目。立川や国立を拠点に仕事をしてきて、趣味で世界中を旅して周り、今自分がここにあるのは「奇跡中の奇跡」とおっしゃる。お話は多岐にわたる。昭和の立川のことはもちろん、桐朋高校20期卒業生に著名な方が多いことから、高度成長期を走り抜けた企業戦士の話題は尽きない。間違いなく今の立川を作ってきたうちのひとりだ。



されましてね、最後の収容所が黒竜江のほとりにあって、シベリア鉄道が通っていて、明日貨物が来てそこに乗せられたらもう戻れないということがわかって、じゃあ、今夜のうちに脱出しよう、1人だけもう衰弱して身体が動かないという人を置いて、32人で脱走したんです。冬だったんで、黒竜江が凍って雪が2mくらい積もっていたので飯盒の蓋を腕に巻いて、雪をかきながら何百mかの黒竜江を渡って、寒いのに汗びっしょりだったと言っていました。途中で気づかれて背後から撃たれて、そこで半分くらい亡くなったそうですよ。弾が耳のそばをビュンと通ったのを聞いた時は生きた心地がしなかったと。満州側に渡っても、中国人に扮したりして逃げて、最後に港へ辿り着いてようやく復員してこられたんです。日本に帰国して会えたのは1人だけだったと言っていました。父が立川商工会議所の会頭と立川市商店街振興組合連合会（現立川市商店街連合会）の理事長を兼任していた時期が7～8年くらいあって、その時に都の商連の機関紙にシベリアの記事を載せたとか言っていました。

——本当によく戻られました。

齊藤 父と母は両養子で齊藤家に来ています。立川でハンコ屋を始めた祖父母には子どもがなかったんで、お祖父さんの兄の子ども、つまり戦争から帰ってきた私の父ですね、お祖父さんにすれば甥っ子ですが、養子縁組をしました。うちのお祖母さんの姪っ子が私の母で、それぞれの甥っ子と姪っ子と呼んで両養子。

——昔はよくあったことですね。

齊藤 戦争が終わった時には多かったです。朝鮮動乱が起きて基地も忙しくなって、ゴム印の需要が多くなりました。英文のゴム印が毎日ミカン箱一杯くらいあって、それで

財産をなしたんです（笑）。
——そこにもお父さまの営業力があつたのではないですか？

齊藤 どうかなあ。母はすばらしい営業マンでしたけれどね。父に功績があったとすれば、それは駅前のデッキ等の再開発事業ですかね。あの事業に国の補助金などを出してもらうことに尽力したようです。また、昭和39年の立川駅タンク車衝突事故で焼失した立川銀座商店街の復旧事業を主導して、立川第一デパートを建設し、初代社長を務めました。

——昔をよくご存じの方は、宝山堂というより齊藤さんねとおっしゃいます。

齊藤 そうなんです。宝山堂より齊藤が前に出ちゃって（笑）。いろいろな役職を兼任していましたからね。印鑑の仕事は母と私とで大きくしていきました。日産があった頃は日産自動車の仕事は一手に引き受けていましたから、日産がなくなったのは痛かったですね。当時はアナログですか

ら、製品の検品にはゴム印が必要でした。いなげやさんやたましんさんからも沢山お仕事を頂戴していました。

——最近は請求書でもPDFでいいとか、そもそも銀行に口座を作るのに印鑑いらなくなりましたからね。

齊藤 そうそう。そうなんです。僕は戦後の団塊の世代のトップで生まれてきています。昭和22年ですから。すべては奇跡だと思いますね。父がシベリアから脱走して生きて帰ってきたことも奇跡ですし、生まれた地が日本だったことも奇跡だし、敗戦もよかったのかもしれないし。そう考えると奇跡中の奇跡で生きているなと思うんです。僕の出身は国立の桐朋なんです。桐朋の20期と言って、みんな高度成長期の企業戦士なわけです。いろいろな人がいましたが、政界財界、医者や弁護士も多く、それぞれに立派に生きています。そんな時代に身を置けたのも奇跡のひとつだと思えます。これからは全てに感謝で生きていきたいですね。

甦るあの頃

昭和初期の「印譜」から

今の立川を作った人たち ①

宝山堂の「印譜」から、第1回は『川口商店』『川口藤一郎商店』のゴム印を追いかける。藤一郎氏は現立川商工会議所会頭 川口哲生氏の祖父。



印譜
右側のページに川口商店、川口藤一郎の文字

川口商店の創業は昭和4年4月。川口藤一郎氏が個人商店として始めた。場所は立川町、現在の曙町。陸軍の正面に居を構え、「陸軍御用達」をゴム印に入れている。陸軍の航空部品や自動車部品を納入していた。東京はまだ「東京府」だった。東京が府から都になるのは昭和18年。藤一郎氏は静岡の酪農で修業し、軍を除隊後立川へ。そこから自動車に目をつけたとは、やはり先見の明があったと三代目の川口哲生氏は語る。

昭和23年5月。個人商店から株式会社川口商店へと成長する。フィンカム前の菊屋川口ビルとして、共同ビル建設前の社屋兼自宅で自動車の部品販売などをしていた。二代目社長になる功氏は、日産自動車でサラリーマンの経験をしてから家業に戻る。その関係から東京日産自動車販売株式会社と指定販売店契約を締結、日産純正部品を主力に各社自動車部品、用品を拡販していく。部品の販売だけでなく、錦町に整備工場を新設。車の販売も始め、派生するあらゆる車に関わる部門を広げていった。高度成長期の波に乗って、功氏は会社を大きく伸ばし、日産との関係に加え横浜タイヤの販売権を取得するなど、哲生氏をして「やり手」と言わしめる社長となった。「父の時代に、自動車に関わるマーケットは飛躍的に大きくなった。自動車に携わっていれば誰でも生活できるという時代だった」と哲生氏。

藤一郎氏も功氏も、地域との関わりを大切にすると哲生氏は言う。「法人会の初代会長が祖父の藤一郎でしたし、父も法人会の会長をやりました。地域との関わりを作りつつ商売をさせていただいたということですね」と。

三代目の哲生氏は、車とは無縁の半生を送ってきた。慶応大学を卒業後、就職したのは博報堂。資生堂の担当となり、商品開発から携わってその広告に専念する。バブル真っただ中、広告代理店黄金時代、その中に身を置いて10数年、さてこれからだ!という時に家業へ戻ることになる。心は定めてもなかなかすぐに身を翻すことはできず、1年猶予をもらってパリへ。仕事をしない毎日。街を眺め、ヨーロッパ各国や北アフリカへ旅行し、今度は本当に意を決して立川へ戻った。三代目を継いだのは平成7年1月。時代はバブルがはじけ、車検法が変わり車検の価格競争が始まっていた。広告業の経験を生かし、お客様目線の車検を目指し、フランチャイズのホリデー車検に加入、「ホリデー車検立川」をオープンさせ、平成13年にはホリデー車検のISO9001を取得。さらに平成15年にはISO14001を取得した。その後も車だけではなく、人に寄り添うあり方を進め現在に至っている。

物事に真摯に対応、どんな人にも丁寧な態度で接する三代目。オシャレな感覚を活かして、初代や二代目同様、これからの立川を牽引してもらいたい。



初代 川口藤一郎氏 (写真: カワグチオートサービス)



二代目 川口 功氏
(写真: カワグチオートサービス)



三代目を継いだ頃の川口哲生氏
(写真: カワグチオートサービス)



曙町の店 (写真: カワグチオートサービス)



初代と創業メンバー (写真: カワグチオートサービス)



曙町 フィンカム前の店 (写真: カワグチオートサービス)



錦町の整備工場 (写真: カワグチオートサービス)



曙町の菊屋川口ビル遠景



川口哲生氏近影

えくてびあんの輪

えくてびあんはリストのお店にあります。
今月は 砂川町・柏町・幸町・若葉町
栄町・高松町・曙町 のお店です。

砂川町 柏町	BREAD & Sweets マニエール 537-2202
	山梨中央銀行 立川支店 536-0871
	株式会社 セレモア 534-1111
	超こってりらーめん パワー軒 535-1665
	H.works 537-7763
	ペーカリー リオンドール 535-4882
	(有)まつい測量 534-4411
	ピーコック 玉川上水店 538-3861
	菅家医院 536-4602
	いなげや 立川幸店 537-1820
たましん 幸町支店 535-5311	
中国料理 SANFUJI 536-3813	
西武信用金庫 幸町支店 537-3101	
お米屋さん 大黒屋 536-0851	
松浦商事 株式会社 535-6001	
至誠キートンホーム 538-2323	
とんかつ・割烹 かつ亭 535-4611	
ドイツ製法ハム・ソーセージゼーホフ工房 535-5009	
和洋菓子 たちばな 537-0347	
青梅信用金庫 535-3411	
BS タイヤショップ 佐藤商会 537-0912	
在宅療養支援診療所 立川在宅ケアクリニック 534-6964	
古楽の小屋 ロバハウス 536-7266	
若葉町	浅見内科医院 537-0918
	スーパー ヤオコー 538-1711
	ありた整骨院 534-1622
	カフェ タイニーガーデン 507-1346
	カフェ・レストラン てくたく 536-5788
栄町	たましん 栄町支店 536-9711
	いなげや 立川栄町店 523-7201
	チーズ王国 本社 513-4101
	高橋酒店 522-4479
	彩食中華 須崎 507-0981
	寝具の石川 524-1333
	手作りパン工房 Bonheur~ポヌール~ 536-3207
	FUKUSHIMAYA 立川店 534-1700
	メンズカット ヤザワ 536-8738
	エフエムラジオ立川株式会社 537-8102
	(株)立飛ホールディングス 536-1272
	大型コインランドリー マンマチャオ栄町店
	高松町
ルーデンス食堂	
米穀・食料品 横町屋 522-2609	
サイクルセンターシバタ 522-3888	
中華料理店 太幸苑 527-0906	
セイロン風カリリー シギリア 507-2418	
ライブハウス Crazy JAM 529-9507	
立川湯屋敷 梅の湯 522-3800	
ヘアサロン イトウ 522-6281	
立川伊勢屋 本店 522-3793	
大野サイクル 523-2061	
立川キリスト教会 526-6826	
サロン・ケベケア美容室 527-4716	
HAIR MAKES たしろ 525-2175	
曙町	うなぎ しら澤 524-5061
	中華料理 福心樓 524-2343
	久住ハウジング(株) 527-8007
	不動産 大晋商事 525-3110
	ヤマハミュージックアベニュー立川 523-1431
	蕎麦懐石 無庵 524-0512

jorakugajo

真如苑提供番組「常楽我浄」

スカパー！：529ch

スカパー！で放送の常楽我浄は
スマホアプリ「スカパー！番組表」(無料)で視聴できます。

J:COM 多摩：11ch・111ch

放送時間については番組表をご確認ください。

www.shinnyo-en.or.jp

街の話題

立川のストリートピアノ

4月22日～24日、GREEN SPRINGSでは芝生の緑が美しい中で、ストリートピアノが開催されました。お天気が怪しくなった時もありましたが、それでも連日演奏したい人がたくさん集まって大盛況。青い風に美しい旋律、気持ちのいい時間でした。



みのたちマルシェ

4月9日と10日には、ファーマーズセンターみのの北側広場で「みのたちマルシェ」が賑やかに開催されました。パフォーマンスステージでは演奏したり踊ったり。ハンドメイドブースでは、気になる小物がたくさん揃っていました。お腹がすいたらキッチンカーです。身近に気持ちよく楽しめる空間があるのも、立川のいい所ですね。



ハンドメイドブースがずらっと並びます

「冒険遊び場プレーパーク」で遊びました！

誰でも一緒に遊べるプレーパークをご存じですか。「冒険遊び場の会たちかわ」が月に1回市内の公園などで開催している、こどもが主役の遊び場です。5月7日、予報に反していいお天気になった緑町北公園で、遊びの専門家「カービー」さんこと星野諭さんを迎えて、いつもより大規模なプレーパーク。なんと参加者は354人。遊びの中で成長していく子どもたちの姿が見られました。立川市社会福祉協議会の「地域課題解決助成金」を受けて開催されましたが、子どもたちの笑顔がはじけていたのが何より嬉しいですね！



カービーさんの車 この中に遊び道具が詰まっています



右側のオレンジのTシャツがカービーさん

オリンピック登場！

4月26日。ふじようちえんのお誕生日会にサプライズがありました。なんと、体操のゴールドメダリストである塚原光男さんと直也さん親子が。光男さんは、メキシコ、ミュンヘン、モントリオールの、また直也さんはアテネのオリンピックで獲得した金メダルをお持ちになっての登場です。金メダルは合計6個。園児たちは触ったり、重さを感じたり、大騒ぎでした。一緒に来園したのは、ビーチバレーの藤井桜子さんと村上めぐみさん。村上めぐみさんは東京オリンピックに出場されていますが、パリオリンピックへは立飛HDの所属として藤井桜子さんとペアを組んで頑張ります。塚原直也さんも立飛HDに所属し、体操で地域貢献していきたいと抱負を語っていました。



光男さんの解説付きで直也さんの演技を観ることができました。その後はお2人で園児の体操指導でした



村上めぐみさん(右)と藤井桜子さん
ビーチバレーの基本を園児に指導していました
とにかく明るくて元気な2人に園児たちも大喜び



右から メキシコ(1968年) ミュンヘン(1972年) ミュンヘン(1972年) モントリオール(1976年) モントリオール(1976年) アテネ(2004年)の金メダル

おめでとう！立川ダイスがB3参戦です！

4月30日、アリーナ立川立飛で立川ダイスのB3リーグ参入記者会見がありました。3人制バスケットボールのチームのみだった立川ダイスですが、2022-23シーズンでは5人制に参入が認められ、新たな挑戦の始まりです。選手は第1号として、3人制でも活躍してきた森黄州選手が紹介されました。その後5月28日から始まる3人制2022シーズンTACHIKAWA DICEの体制発表があり、チーム結成以来ずっと頑張ってきた池田千尋キャプテン以下6名の選手が紹介されました。この他に外国人選手も参戦予定です。アリーナ立川立飛をホームとする正真正銘立川のチームです。市民一丸となって応援したいですね！がんばれば、立川ダイス！



右から 川口哲生立川商工会議所会頭 森黄州選手 原宏樹(一社)多摩スポーツクラブ代表理事



3人制TACHIKAWA DICEのメンバー
前列中央が池田千尋キャプテン



アリーナでこんな風景が日常になる予定です
勝つためには皆さんの熱い応援が必要です！

表紙

水面に映る新緑

今回の表紙は少し抽象的なモチーフになりました。と言っても、見えているままを写しています。表紙に記した題名は「薫風」「若葉風」とも「緑風」とも呼ばれる清々しさ。水面に映る木々の新緑は、五月の風が水を揺らしう見えます。新緑を撮ったものでもあり、風を撮ったものでもある、そんな表紙です。目に見えるものを追うのもステキですが、目に見えないものを見ていく努力も惜しみたくない。「五月の風を撮る」という命題に今回の答えはこの写真でしたが、答えは1つではないし、常に挑戦。コロナ禍で「立川で三代」という10年続けてきた表紙テーマが途切れましたが、コロナの中に新しい表紙テーマを与えられているようです。

かたこと

◆ずっとコロナだったトップニュースが入れ替わり、停戦の見通しが立たない中、尊い人命をなんとかして救えないかと祈る日々が続いています。日本では3年ぶりに規制の無き大型連休。立川では新規オープンやリニューアルオープンが相次ぎ、連休らしい賑わいを見せていました◆今号のインタビュー「きらりこの顔」と、見開きの「街を歩けば」は連動しています。昨年えくてびあんが手にしたゴム印の「印譜」から、今の立川を作ってきた人々を振り返ってみようというコンセプト。さて、第2回はどんなお名前が登場するのでしょうか。お楽しみに◆「月刊えくてびあん」は今年の8月に創刊から39年を迎えます。立川はいろいろな人を受け入れて、いろいろな変化も受け入れる街。食べ物の流行もすぐに反映されてきました。イタリアンのお店が増えた時期、ガッツリ肉のお店も流行りました。唐揚げ専門店もありました。ラーメンは、いまだに都内有数の激戦区。ふわふわ生食パンの流行もなんとなく続いているような。そんな中で、消えていったのが和菓子屋さん。えくてびあんで和菓子の特集をしたこともあったのですが、今はできない企画になりました◆イノベーションと言われて久しい。新しい機軸に則った刷新、革新のことのようです。広報たちかわを開いたら、立川観光コンベンション協会の推奨認定品が紹介されていました。「立川らしさがぎゅっと詰まった自慢の逸品」揃いです。39年前とはずいぶん異なるラインナップ。そこに新しい機軸が見えてくるかもしれないですね。求めてみましょうか。

えくてびあんスタッフ一同

えくてびあん ㊄

6月号 第38巻 通巻447号

令和4年6月1日発行
発行 有限会社えくてびあん
〒190-0023
東京都立川市柴崎町2-1-10 高島ビル4F
TEL 042-528-0082 FAX 042-528-0065
E-mail message@tamatebakonet.jp
URL https://www.tamatebakonet.jp
発行人 黒須 環
企画・写真・編集 えくてびあん編集スタッフ
デザイン 池田隆男 (WATER DESIGN ASSOCIATES)
印刷 ダイオームウラ株式会社・DECK C.C.

無断転載を禁じます。



ネモフィラ カフェ入口付近で 花、花器とも大森良子

私の立川 私と立川

②

朝六時入店。すぐに野菜を刻み始める。コトコトコトコト：刻んで煮込んで、ミネストローネ、ポタージュ、それにもう一つのスープ。三種類のスープを仕込んだら、マフィンを焼きます。窓の外、自転車と共に去っていく声「いいにおい！」店先を下がる旗のロゴを読み上げて行くランドセルの子どもたち「なんでもない日〜！」

幸せだな…と思う。縁もゆかりもない立川の根川緑道沿いに、カフェを開きたいと思ったのが十余年前。それが夢ではなくて、今では日常になっている。

「今日のスープ、なに？」そう言つて店内のメニュー黒板に目をやる顔は、老若男女みんな可愛く見える。食べてくれるということは、信用してくれるということだから、裏切っちゃいけない。そんな気持ちで作ってます。失敗するけどね。

カフェ「なんでもない日」をきっかけに、これから十一人の女性がエッセイを書いてくれます。きつというんな味。引き受けたものの、どーしよう…と悩んでいる人もいるけれど、甘い、辛い、酸っぱい、どんな味もスープに煮込めば深みが増すから、心配いらなよ。

店主 中倉真知子